

第5回 ふるさとづくり有識者会議

日時：平成25年11月19日（火）

17:15～18:15

場所：内閣府本府5階特別会議室

- 1 開会
- 2 討議
- 3 閉会

【配付資料】

ふるさとづくりガイドブック

ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集

資料1 ふるさとづくり啓発資料配付先

資料2 ふるさとづくり実践活動の概要

資料3 ふるさとづくり有識者会議の今後の進め方について（案）

資料 1

ふるさとづくり啓発資料 配布先

発行部数 (A)	10,000
----------	--------

配布先		積算	部数
ふるさとづくり推進組織		3,064団体	3,064
自治体	都道府県	47×5部	235
	市区町村	789市×2部 23区×2部 746町×2部 184村×2部	3,484
ふるさとづくり有識者会議委員		13名×10部	130
各省	内閣官房・内閣府		150
	総務省		150
	文部科学省		150
	農林水産省		150
	経済産業省		150
	国土交通省		150
合計 (B)			7,813

(A) - (B) = 2,187部

(ふるさとづくり推進実践活動で使用)

ふるさとづくり実践活動の概要

- 1 ふるさとづくり推進実践活動 in 小田原
- 2 ふるさとづくり推進実践活動 in 岡崎
- 3 ふるさとづくり推進実践活動 in 南丹

1 ふるさとづくり推進実践活動 in 小田原について

1 概要

日時：平成25年10月4日（金） 11時00分～13時30分

場所：小田原市役所庁議室

出席者：○補佐官：木村 内閣総理大臣補佐官

○委員：後藤 委員、濱田 委員、藤崎 委員、マリ・クリスティーヌ 委員

○各省：黒田 内閣官房内閣審議官、猿渡 総務省地域政策課長、天河 国土交通省まちづくり推進課長

参加者：○小田原市：加藤 小田原市長、関野 教育部長、諸星 文化部長、原田 文化部副部長、柏木 教育総務課長、乗畑 教育指導課長、古矢 生涯学習課長、鈴木 教育指導課指導主事、石井 教育指導課指導主事、大木 生涯学習課副課長、村田 生涯学習課生涯学習係長、岡 生涯学習課郷土文化館係長、湯浅 生涯学習課尊徳記念館係長

○団体：奥村 NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事長



2 現状と課題の整理、意見交換（○：有識者委員 ●：小田原市）

- 生涯学習の裾野を広げていく必要があると考えているが、行政が学びのプログラムを作るのでは実態に合わない。町中がキャンパスであり、誰もが主体的に学べる場を作っていきたい。
- 生涯学習に取り組むにあたって、行政が縦割りで実施するのではなく、横串を刺して連携を図っていききたいと考えている。そのための横串がキャンパスおだわらである。
- 今後の課題としては、現在、地域の魅力を感じられる様々な学びの場を提供する事業を市民団体及び行政で設けているが、事業の担い手である市民団体同士と行政の連携強化及び役割分担の明確化を進めていくことが課題と考えている。
- キャンパスおだわらの発想はいいと思う。生涯学習の受講層はどのあたりの世代が多いのか。
- 勤労者世代が少なく、高齢者世代が多い。子ども向けの講座等を意識的に多く設けるなどして、子ども世代の受講を増やそうとも考えている。
- 図書館などの公共施設を学びの場として活用しようとすると、公共施設がリタイア世代で埋まってしまう。学校と連携し、学校を活用することを考えるべき。
- 尊徳学習は、全校で取り組んでおり、尊徳記念館には子どもも多く来館する。
- 小田原検定はどのような形で実施しているのか。
- 検定は三択問題で、実際に現場に足を運ばないと回答がわからないような問題にしている。市内を周り、見学してきたところについて検定を行う。住民が主体と鳴って取り組んでいる。
- 箱根との連携は行っていないのか。宿場として小田原と箱根は繋がっていた。小田原・箱根検定などもいいと思う。
- 現在、ジオパーク、美術館で連携を行っている。
- 面白そうな講座があると思うが、その割に受講人数が少ない。どの講座に人気があったか、どの世代に人気があったかといった総合的な把握を行うべき。勤労世代を参加させるには、子どもを参加させること。勤労世代は単独では出てこなくても、子どもと一緒にあれば出てくる。
- 生涯学習は市民だけが対象か。市外からも参加可能か。
- 市外の方も参加可能。小田原市に市外の方が訪れることで、市民の刺激にも経済にも貢献してもらえると考えている。
- 欧米では、80代、90代でも学位が取得できる。教育機関と連携して、卒業証書もらえる、資格を取れることができるようであれば高齢者世代にも励みになる。ニーズに合わせた取組みが必要。高齢者世代はネットが使えない方も多いので、ネットだけでなく、紙での情報提供が必要。
- 小田原の代名詞といえば、何があげられるのか。例えば、千葉県成田市では、「住んで良し、働いて良し、訪れて良し」のフレーズでPRを行っている。小田原には歴史

的な建物も多く残っているので、茨城県（常総市）の坂野家住宅、東京千駄木の旧安田邸などのように歴史・文化を有料で貸し出すといったことも考えてもいい。

- ふるさと学を推進するにあたって、市民の学習ニーズは高度化や多様化が進んでおり、これに即した実践方法や開催時期、メニューの見直しが必要だと考えている。
- ふるさと学はよく整理され、教育委員会が主体となって実施しているスクールボランティアもいい制度だと思う。更に進めるためには、現状をしっかりと把握し、市長・教育長が主体となって、ロードマップを作成すべき。

2 ふるさとづくり推進実践活動 in 岡崎について

1 概要

日時：平成25年10月14日（月） 14時00分～15時50分

場所：岡崎市東部地域交流センター・むらさきかん（第6活動室）

出席者：○補佐官：木村 内閣総理大臣補佐官

○委員：後藤 委員、殿村 委員、原 委員

○各省：大村 内閣官房内閣参事官、猿渡 総務省地域政策課課長、
平林 文化庁伝統文化課課長、天羽 農林水産省大臣官房政策課課長、
須藤 経済産業省産業機械課課長、中村 国土交通省まちづくり推進課官民連携推進室室長

参加者：○岡崎市：内田 岡崎市長、中安 岡崎市副市長、大竹 岡崎市都市整備部部長、
柴田 岡崎市都市整備部次長、天野 岡崎市都市計画課 主幹、木下 岡崎市都市計画課主任主査

○団体：鈴木 藤川まちづくり協議会会長、原田 藤川まちづくり協議会副会長、
西脇藤川まちづくり協議会 藤川宿研究部会長、天野 藤川まちづくり協議会事務局長（NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた）



2 現状と課題の整理（岡崎市、藤川まちづくり協議会）

- 藤川には、既に様々な資料が存在している（藤川宿散策のしおり、藤川景観まちづくりガイドブック、案内人の手引き等）が、体系化された教材の整備の中で、地域学習資料として再編集が必要。
- 効果的な講座のコーディネートのため、講座の進め方、案内人組織設立・運営への先導の検討が必要である。
- ふるさと学の実施団体の組織づくりの立ち上がりには、行政支援を活用する必要があるが、行政側でも、縦割りではなく、横串を刺した連携が必要である。
- 地域のまちづくり団体だけで、課題全てを解決するのは難しいため、地域の小中学校、高校、大学との連携が課題であり、さらに地域NPOや企業と協力して進めていくことが必要である。単発でなく、継続的計画的にやっていかなければいけない。
- 多様な世代の参加促進、次世代（若い世代）につないでいく必要があるが、仕事、学業等により、参加が難しい。地域勉強会の存在を知らない人、興味はあるが参加できない人への活動の周知、地域内での共有等、情報の発信が必要である。
- 「よそ者」の専門家に加えて、地域住民自らが学び合い、教え合いの中で講師にふさわしい技術を身につけることで、講師の育成及び確保を図っていきたい。
- 現在、藤川まちづくり協議会において、補助金等で補っている分（例：藤川塾の会場費、印刷費など）の費用は、補助金が永続的ではないため、今後、運営費の確保と収益事業の確立が課題である。

3 意見交換での主な意見（○：有識者委員 ●：まちづくり協議会、岡崎市）

- 取り組みを聞くと凄く頑張っていると思うが、今の人達は五感が満たされないといけない。例えば麦ごはんもいいが、それだけでは駄目で、インパクトがあるものが必要。今はフェイスブックやツイッターで電波しなければならず、ビジュアル的に栄えるもの、そして一言で言えるものでなければならない。そういったものがあるだけで全然違う。
- まず注目されること。注目をされると色々な人が訪れることで、様々な意見を言っていく。その声を聞いてそれを取り入れていくということが一つの流れ。
- ふるさと学について、岡崎市では、義務教育の小中と、副読本で「おかざき」というものがあり、郷土の偉人等を学ぶことができる。しかし、藤川地区の小学校では、宿場町であったことを学校でも教えているが、街並みがほとんど残っていないため、宿場町ということを経験はしても、リアルに体験をする場があまりない。
- 歴史的建造物だとか、むらさき麦などは、現在の地域の人が活動をして行く中で、先生になって、それを繋いでいって、地元を知ることへの取り組みとなっている。
- 今、時々全国版のニュースにもなっている、田んぼアートというのをやり始めている

地域がある。例えば人口六千人の小さな村では、山も海もない何も特色もなかったが、田んぼアートをやり始めて、全国的にも先進的な地域になり、それを見るためだけに、年間 20 万人もの人が訪れている。そこにはホテル等の宿泊場所はないが、周辺の温泉などがある街に泊まったりするので、周辺の街にも波及する。むらさき麦も、他の稲等と組み合わせる出来る可能性もあるのではないか。

○ここでしか買えない、むらさき麦を使った紫色の商品があれば。例えばむらさき色のお饅頭など。そして、ポリフェノール等など、健康面の成分があれば、健康面を前面に出せば、今の若者を始め消費者はとても興味を持っているので飛びつく。

●地元としても、官民連携は、都市計画課が一番協議会とコラボレーションしているが、地元にしてみれば対岡崎市であり、特に都市計画課に限った話ではなく、市側の方も、縦割りではなく、横断的にやっていかなければならない。ただ、理屈では分かっているが、なかなか上手くいかない部分もある。

●藤川道の駅では、管理も一部、地元のまちづくり協議会にお願いしており、このお願いに委託金を支払い、まちづくり協議会はそれを資金源として獲得し、新たなまちづくりへの取り組みに繋がるエリアマネジメント的なことも始まっている。

○観光客にどうやってお金を落としてもらおうかについて、今、農業体験観光が凄く流行っている。この岡崎市でも、むらさき麦の収穫を体験し、その場で加工して、お饅頭や麦ご飯などを作ることを一つのパッケージにして、JTB や近畿日本ツーリストなどを巻き込んで、ホテルなど一緒に行くことが、すぐできると思われる。

●以前藤川で、3世代（現在、25年前、50年前）の地図を広げ、それぞれ大切な場所や遊び場はどこか、地図に書き込んだワークショップを行った。今の子供達の遊び場、大事な場所は局所化しており、公園、自宅、友達の家、学校と大体4箇所に集約された。一方で25年前、50年前の、親、お爺さんお婆さん世代になると、街のそこから中が大事な場所、遊び場であった。今の現代は変質してきている。

●中間報告の1ページにあるように、一番大事なのは、まちづくり協議会が知恵を絞り、周辺の人や学校に呼びかけながら、商品開発にあたって、色々なものを巻き込んでいく姿勢こそが、ふるさとを愛する大切さを気づかせてくれる、一番大切なものになっていく。

3 ふるさとづくり推進実践活動 in 南丹について

1 概要

日時：平成25年11月10日（日） 15時30分～17時10分

場所：南丹市美山町自然文化村河鹿荘

出席者：○補佐官：木村 内閣総理大臣補佐官

○委員：小田切 座長、後藤 委員、殿村 委員、濱田 委員、原委員、
マリ・クリスティーヌ委員

○各省：大村 内閣官房内閣参事官、猿渡 総務省地域政策課長、島田 文化庁文化財部主任文化調査官、天羽 農林水産省大臣官房政策課長、須藤 経済産業省産業機械課長、天河 国土交通省まちづくり推進課長

参加者：○南丹市：佐々木 南丹市長、大野 企画政策部長、弓削 美山支所長、八田 企画政策部地域振興課長、西田 美山支所地域総務課長、中島 企画政策部地域振興課課長補佐、大秦 美山支所地域総務課係長

○団体：美山まちづくり委員会
中川 委員長、高御堂 副委員長、菅井 副委員長、大東 委員、武田 委員、上田純子 委員、上田道雄 委員

○京都府：岡西 副知事、中野 総務部長、松本 総務部理事、田中 総務部自治振興課参事



2 現状と課題の整理（美山まちづくり委員会）

- 美山には、茅葺き屋根の住宅（50戸中38戸）、由良川・美山川の清流（京都で1番、近畿でも2番の清流）、京都大学芦生研究林（手つかずの森、多種多様の生物が生息）、伝統的な生活（建物だけでなく、昔から続く日々の暮らし）という4つの資源があると認識。
- 上記のような資源はあるが、毎年100人くらいずつ人口減少しているのが現状。
- 美山の高齢化率は40%を超えており、10年後には50%超となる見込み。
- 地域のため、昭和53年から農業近代化施設、集落・地域の環境整備を実施したところ、昭和50年代の後半からは豊かな自然に惹かれ、美山で暮らしたいという都市住民が増加。
- 平成4年には第3セクター「美山ふるさと株式会社」を設立し、住居の斡旋だけでなく雇用も含めた転入者の受入を実施するとともに、特産品である美山牛乳の製造、販売も実施。
- しかし、地域での少子高齢化も進んだことから、平成13年には地域と行政を結び組織である振興会を各地域に立ち上げ、①住民の利便性向上 ②地域課題の掘り起こし ③人材発掘・育成 を行ってきたところ。
- 平成17年には住民による魅力あるまちづくりを進めるため、「美山まちづくり委員会」を設置、①住民組織、第3セクター、広域法人が連携しての地域課題の解決 ②新市のまちづくりの提案 ③新市との連携による地域振興策の実現 に向けて定住促進、特産品開発・販売、景観・環境保全プロジェクトを推進。
- また、市、仏教大学とともに地域における研修の場として「美山フォーラム」を平成18年度から開催。

3 意見交換での主な意見（○：有識者委員 ●：まちづくり委員会、南丹市）

- 美山は、既に自ら動く組織が出来ているというのが第一印象。
- 地域づくりの「づくり」とは、作り直し、すなわち地域の革新ということであり、「地域の意思決定の仕組みをつくり直す」、「後継者をつくる」という2点と言い換えることもできると思うが、意思決定の仕組みである委員会での若者、女性の活用状況はどのようなものか。
- やる気のある方が参加しているのが現状で、結果的に男性が中心となっている。
- 「後継者をつくる」ということは、いかにして若い層を地域に取り入れていくかということだが、何か取組みをされているのか。
- 以前は、地域に青年団があり、青年団が地域行事を行うなど、地域で若い層が活躍していた。現在は、その役割を消防団が担っているが、仕事・勤めとの関係で地域行事が出来ないのが現状。若い人が活躍できる場を提供していきたいとは思っている。

- 美山の取組は素晴らしいと思うが、外部にその取組が伝わっていないのではないかと
思う。いろいろな魅力があるが、「This is 美山」が必要であり、そういった魅力を伝
えるため、例えば土日だけの美山での生活、「プチ移住」などを検討してはどうか。
京都ブランドにはすごい力があり、京都にプチ移住ができるなら美山に行きたいと考
える人はいるはず。いきなり定住・移住は厳しいかもしれないが、いい結果に繋がる
と思う。
- 美山の景観は、他の人が遊んでいる土日に美山の人が遊びにも行かず、しっかりと景
観づくりをした結果、つくられたもの。自分自身、美山の良さに都会に出てから気が
付いた。それまではずっと美山を出たいと思っていた。自然がいい、ゆったりしてい
るからいいだけでは美山に住めない。地域の人にゆとりがあり、おもてなしの心がな
いと外部の人は受け入れられない。
- 美山に土地はあるが、お金がないと家が建たない。空き家もあるが、持ち主の貸出条
件があり、条件も厳しい。空き家バンクなどの公的な対策・システムが必要で、現状
での空き家の貸出は難しい。
- できることから一緒に、ちょっとやってみましょうという軽い気持ちから取組みを始
めてみることはできないか。
- いただいたご意見は参考になるため、取り組んでみたいが、まちづくり委員会だけで
はなく公の力が必要だと思う。
- 美山への1ターンやUターンのニーズはないのか。
- ニーズはあるが、やはりお金が問題である。地域にとっては空き家扱いの家でも、仏
壇などがあり、年に1~2度、人が戻ってくるため、貸し出すことが難しい。
- 10年以上人の住んでいない本当の空き家もあるが、人の手をいれないと住めない。
ガスや水道のこともあり、住めるようにするには数百万円は掛かる。先に数百万円を
負担し、新たに住む人に分割払いをしてもらおうというやり方もあると思う。
- 地域と地元の小学校、中学校、高校との間で関わりはないのか。市の教育課程に地域
学習は、カリキュラムとして組み込まれていないのか。
- 8月23日に地藏盆という行事があり、地域一体で子どもの祭りを行っていたことも
ある。また、学校においては、山村留学で域外の子どもを受け入れたり、家庭ではで
きない農業体験を総合学習で実施したり、限られた時間内で努力はしている。
- 経験上、地域を知るだけの学習ではなく、地域と一緒に課題解決型の学習を行わない
と将来、雇用を生むことができないと思う。児童が日常的に美山と関わる体制を早く
構築すべき。
- 美山は観光が雇用の基本となると考えている。観光視点でまちづくりをしようという
時に、我々に何ができるかを教えていただきたい。
- 美山に来る60万人の観光客は何故来ると考えているか。
- 先人の残した文化・環境等をマスコミが流しているからではないか。

○60万人もの観光客が訪れる理由を分析すべき。特に車で1～2時間の周辺地域の誰に来てもらっているのかを知るべき。

●空き家対策もそうだが、分析を行うには公の力も必要。

●南丹市としても空き家や公営住宅の入居基準等の問題は理解しており、今後、対応を進めていきたい。

○美山のまちづくりは情熱を持って取り組んでいると強く感じた。年度末のふるさとづくり推進最終報告までに何回かこういった場を設けさせていただき、最終報告でモデルケースとして提言させていただきたい。